

課題対応取組み報告書

名称	阿倍野区地域包括支援センター
提出日	令和 5 年 6 月 6 日

カテゴリー (※主なものをひとつチェック)	☐ 地域や専門職とのつながり等	☒ 社会資源の創設（居場所づくり等）
	☐ 認知症高齢者等の支援	☐ 自立支援・介護予防・健康づくり等
	☐ その他（ ）	
活動テーマ	チャレンジ！「誰にもでも優しいまちづくり」（支えられる人も支える人も） P A R T 3	
地域ケア会議から 見えてきた課題	①認知症や精神疾患の理解が十分ではない。 ②身寄りのない高齢者・高齢者の孤立化がある。 ③気軽に集える場が少ない。 ④地域包括支援センター（以下「包括」という）・総合相談窓口（以下「ランチ」という）の相談窓口としての情報が、必要な地域住民に知られていない。	
対象	地域住民（支えられる人・支える人）、支援関係機関など	
地域特性	【長池地域】区の南東に位置し、昔ながらの民家が多いが、駅周辺や地域南部には単身者用のマンションも多い。駅周辺は栄えており大型スーパーもいくつかあるが、その間の地域にはスーパーなどは少ない。東西の交通の便が悪く、町会加入率は低い。単身者用のマンションも増えてきているので、地域とのつながりを持たない人も増えてきている。 【清明丘地域】区の南西に位置し、戸建ての家が多く、ひとり暮らし高齢者が多い。坂が多くあり、交通弱者が多い地域。地域の南部は坂が多く、高齢者には移動が難しい。スーパーなども少なく買い物が不便である。地域活動の担い手が不足していたり、若い世代が多いが近所付き合いが少ない。地域活動は活発ではあるが、周知が十分できていない。 【阪南地域】区の南部中央に位置している。昔ながらの民家とマンションが混在している。高齢者の独居世帯も多い。空き家も多くなりゴミ屋敷も多い。小学校や公園が少ない。長屋が多い地域であり、最近マンションが増えた。また、大型マンションが2か所ある。地域活動者において、複数の活動を同じ人が担っていることが多く、人材不足。役所までの交通が不便である。	
活動目標	①個々の事例対応により、認知症や精神疾患についての理解を深める機会を持つ。 ②地域と連携し、身寄りのない・孤立した高齢者が困っているときは早期に対応できる体制づくり。 ③誰もが気軽に集える場の再開や新しい集いの場の立ち上げの協力。 ④包括・ランチの相談窓口としての情報や、介護に直面する前に介護のノウハウや相談窓口を知っておくことで、家族も近隣も正しい理解のもと支援を必要とする人に対応ができる。	
活動内容 (具体的取組み)	①認知症・精神疾患のある外国籍でひとり暮らし高齢者のケースがあった。本人は海外から嫁ぎ夫は亡くなった。このケースを通して外部講師を招き対応についての新たな視点を学び実践した。また、V R（バーチャルリアリティ）技術を活用し、認知症の症状を本人視点で体験し、その状況で何を感じ、何を思うのか実感できなかった感情を体験した後、参加者が感想を述べ合い、認知症がある方を取り巻く環境をどのように変えることが状況改善につながるかを考えた。 ②④早期に相談できる相談窓口の周知のために、周知チラシを作成し、保管しやすい紙質に工夫するなど、相談窓口を厳選した。包括・ランチ・認知症初期集中支援チーム（以下「オレンジチーム」という）・社会福祉協議会についてはQ Rコードも載せ、地域福祉活動コーディネーターも載せている。このパンフレットを地域でローラー配布した。また、日常生活に取り入れやすい、健康づくり・介護予防方法を取りまとめた冊子を作成（1500冊）地域に配布した。 ③高齢化が進むマンションの理事・管理人より、気になる高齢者の安否確認をきっかけに、集会所を集いの場にしたいと要望があがり、「百歳体操」の立上げに協力した。	
成果 (根拠となる資料等があれば添付すること)	①スーパーバイザーより助言を頂く事で、包括職員自身もスキルアップとなる。高齢者にとって、自分が生まれ育った国の文化を知り対応することが重要であると助言を受け、対応を行い、現在母国語の話せるサービス事業所が支援し在宅生活を継続している。 VR体験では、認知症状を体験することで、認知症がある方を取り巻く環境について、どのように変えることができるか、参加者が言葉にすることができた。 ②新しく相談窓口を載せたパンフレットのローラー配布後、「パンフレットを見て相談の電話をした」と連絡が入った。保管しやすい紙質であるため、配布した地域役員・民生委員からは良い評価を頂けた。 ③百歳体操の拠点の立上げと共に、高齢化が進むマンションであるため、認知症についての理解も必要という意見が出て「認知症サポーター養成講座」の開催し、「ちーむオレンジサポーター」に登録され認知症の人の支援へとつながった。	
今後の課題	・今後も、様々な専門知識が必要なケースへの対応を求められると考えられる。ケースに関わる関係者と連携し、職員自身も専門職としてさらにスキルアップしながら、対応する必要がある。 ・早期発見・早期対応を行っていくため、地域からの相談が気軽にいただけるよう、アフターコロナの「顔の見える関係づくり」を再度行っていく必要がある。 ・認知症の人も家族も地域の方も、気軽に「集える場」が未だ再開できない地域がある。	
※以下は、区運営協議会事務局にて記入		
区地域包括支援センター 運営協議会開催日	令和5年7月10日 （ 月 ）	
専門性等の該当 (※該当個数は問わない)	☒ 地域性 ☒ 継続性 ☒ 浸透性・拡張性 ☒ 専門性 ☒ 独自性	
評価できる項目（特性） についてのコメント	抽出された課題それぞれに対して取組みが展開されており「地域性」に該当する。認知症の啓発などは、今後の先を見据えて今必要な取組みは何かを考えて取り組んでおり「継続性」に該当し、VR体験の導入などは「独自性」に該当する。個別性の高いケースについては、外部講師を招いて地域ケア会議を行い、支援方法の新たな学びを得る機会を持つことができおり、「専門性」に該当する。認知症の高齢者の見守りをきっかけに、居住するマンションの集会所で百歳体操の拠点を立ち上げ、おれんじサポーターの登録につなげるなど、支援の輪を広げられており、「浸透性・拡張性」に該当する。今後も引き続き、解決困難な課題に対して外部講師や民間のアイデアを幅広く取り入れながら取り組んでいただきたい。	
* 今後の取組み継続に向けて、区地域包括支援センター運営協議会からの意見等を記載。		